

14—15世紀トスカーナ地方の家族と貧困

——都市と農村の葛藤——

高 橋 友 子

I. はじめに

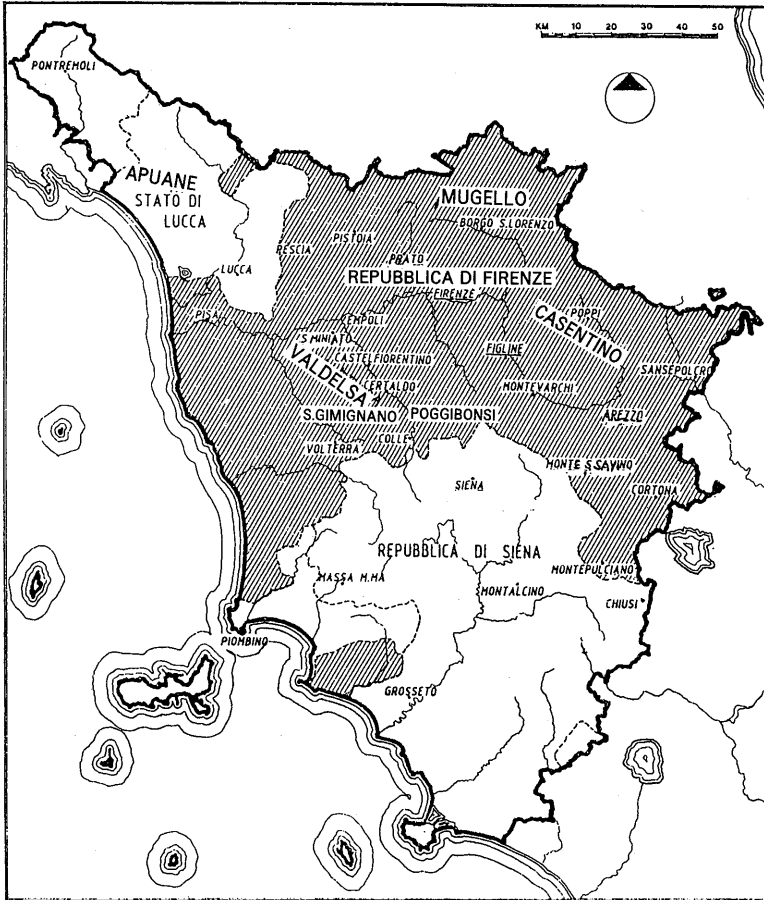
夫婦とその子どもから成る核家族、すなわち、単純世帯は、工業化された近代社会の産物ではなく、前近代のヨーロッパ社会においても多核世帯や拡大世帯に対して優位を占めていたことは、現在では近年の家族史研究の発展によって周知の事実となっている⁽¹⁾。このことは15世紀のトスカーナ地方に関しても、たとえ単純世帯の優位が工業化以前のイギリスほど貫徹されてはいなかったにせよ、概ね該当するであろう。ハーリヒィとクラピッシュ・ズベルによる1427年のカタスト Catasto の研究によると、当時トスカーナ地方の北部を占めていたフィレンツェ共和国の支配領域に居住していた59,770世帯のうち単純世帯は32,751世帯で、全体の54.8%に及ぶ。一方、多核世帯は18.66%、拡大世帯は10.64%となっている。また、独居者が13.61%と、拡大世帯を凌いでいたことも注目される⁽²⁾。

さて、14—15世紀のトスカーナ地方は、都市に人口と富が集中していたという点で、当時のヨーロッパにおいては特殊な地方であったといえる。とりわけ1348年の黒死病以降、他の都市を制してトスカーナ地方で最有力都市となったのは、フィレンツェである。フィレンツェでは、13世紀末から14世紀にかけて新しい市壁が造られ、都市域が拡大した。1348年の黒死病以前の同市の人口は約9万人から12万人であったと推定されている⁽³⁾。当時のイタリアでこの規模の人口を有していた都市はミラノとジェノヴァとヴェネツィアで、アルプス以

北ではパリだけがこれらの諸都市に匹敵しえた⁽⁴⁾。このことは、アルプス以北の地域と比較して、この時代のイタリアがいかに都市化の進んだ地域であったかを示唆していよう。フィレンツェは、14世紀後半から15世紀にかけて支配領域を拡大し、それに伴ってトスカーナ地方における政治的ヘゲモニーの獲得と経済的繁栄、さらに労働市場を提供する大都市としての人口の吸引力によって、富を蓄積していった。1427年のフィレンツェの俗人の人口は37,245人で、当時のフィレンツェ共和国の支配領域の俗人人口全体の約14%に相当するが、彼らは同領域の富の約3分の2を占有していたのである⁽⁵⁾。また、富の不均衡は、フィレンツェ市内の社会階層のあいだにも存在した。フィレンツェに居住する人口のわずか1%にしか相当しない100の世帯が、フィレンツェ市の富の約4分の1と、フィレンツェ共和国の支配領域の富の約6分の1を所有していた。一方、この都市の全人口のうちの約14%は資産を持たない層で、この経済的な最下層に、資産はあるが資産を越える負債を抱えていた者たちを加えると、同市の全人口の約31%にも達した⁽⁶⁾。つまり、フィレンツェでは人口のわずか1%に当たる階層が動産と不動産を合わせた突出した富を享受している一方で、人口の約3分の1を占める底辺層が不安定な生活を営んでいたのである。

このような特徴を持つトスカーナ地方の家族の生活状況は、都市と農村の差異や社会階層間の違いとどう関わっているのだろうか。本稿では、14世紀から15世紀にかけてのフィレンツェ市とトスカーナ地方の農村の家族の状況をスケッチし、その比較を試みたい。ただし、先述の100の世帯に相当する上層市民層、すなわち、都市の政治支配階層の家族像と家族をめぐる問題に関しては、日本でもこれまでに比較的多くの研究が発表されている⁽⁷⁾。確かに上層市民層の家族については他の階層と比較して史料も豊富で、これが研究の進展を促しているといえよう。しかしながら、先述のように、上層市民層は人口全体のわずか1%にしか相当しない。ゆえに、上層市民層の家族を都市市民全体に一般化することはできず、全体から見ると彼らはむしろ特殊な階層であったと見做す方が妥当であると筆者には思われる。したがって本稿では、上層市民の家族に

地図1 15世紀中葉のトスカーナ地方



La società del bisogno. Povertà e assistenza nella Toscana medievale, cur. G. Pinto, Firenze 1989, p. IX, より作成

についてはあまり立ち入らずに、むしろフィレンツェの人口の残り99%に相当する人びとがどのような家族の営みを繰り返していたのかを中心に論じる。もちろん、社会階層が下層になればなるほど、史料は少なくなり、明確な像を描く

ことが困難になる。しかし、本稿では、これまでの日本のイタリア史学界において総括して考察されることが少なかったフィレンツェの中下層に焦点を当て、欧米における既存の研究を手掛かりにして、荒削りではあるが可能なかぎりのスケッチを試みたい。次いで、トスカーナ地方の農村部の家族がどのようなものであったのかを考察し、最後に、家族の営みを比較することから見えてくる都市と農村の関係について、いくつかの指摘をおこないたい。

II. フィレンツェの平均的世帯と貧困

まず、都市と農村の社会階層と世帯の規模の関係を、先述の1427年のカタストの研究を手掛かりにして明らかにしてみよう。

1427年のフィレンツェ共和国の支配領域の農村部の世帯の規模の平均は4.74人である。これに対してフィレンツェ市では、世帯の規模の平均は3.8人となっている⁽⁸⁾。農村部よりも都市の方が平均的な世帯の規模が小さかったのである。3.8人といえば夫婦と子ども2人にも満たない数字であるが、このような数値が出るのは、寡婦や寡夫を含む独居者が農村よりも都市により多く住んでいたことにも起因する。一方、農村では、当時の社会的慣行であった男子のあいだでの分割相続制による土地財産の分散を防ぐため、あるいは、農業労働が少しでも多くの人手を必要としたために、都市におけるよりも大きな世帯が形成される傾向にあった。

次に、1427年のフィレンツェの世帯の規模を社会階層別に眺めてみよう。課税対象となる資産が3,201フィオーリーノ以上あるとカタストに記されている同市の上層階層、すなわち、主として商人や銀行家、毛織物や絹織物の製造業者であり、農村部に土地を所有していた階層の世帯の規模の平均は、6.3人である⁽⁹⁾。しかし、先述のように、フィレンツェ市の人口においてこの階層が占めていた割合はわずかにすぎない。この階層は政治支配階層ではあったが、人口全体の中で見ると、きわめて特殊な階層であったといえる。一方、手工業者や小店主などから成る中層階層の世帯の規模の平均は、4.3人から4.6人となって

いる。そして、織物業や建築業などに日雇いで雇われている下層の労働者の世帯の規模の平均は、3.7人である⁽¹⁰⁾。この数字はフィレンツェ市の平均的な世帯の規模である3.8人に最も近いので、フィレンツェ市で最も多かったのは下層階層の世帯であったと考えられるだろう。この階層はまた、はじめに述べた1427年のフィレンツェ市の全人口の約3分の1を占める底辺層とほぼ重なり合う。しかし、このような社会階層別のカテゴリーは決して固定的なものではなく、上層であっても事業が倒産したりすると、より下の階層に落ちる可能性があったし、逆に中層の出身であっても財力を蓄えて上層の中に入り込む者もいた。したがって、社会階層の区別はこのような流動的な含みを込めたものとして理解される必要があるだろう。

1427年のカタストのデータを利用して、世帯を形成している夫婦間の初婚年齢を算定すると、フィレンツェでは男性が29.95歳、女性が17.96歳であるのに対して、農村部では男性が25.63歳、女性が18.36歳であった⁽¹¹⁾。女性の初婚年齢はフィレンツェでも農村部でもほぼ同じ年齢だが、男性は農村部よりもフィレンツェの方が晩婚である。これは、農村の主要な人口を構成していた農民のあいだでは、より多くの労働力が必要とされたために、都市におけるよりも男性が早く結婚する傾向があったのに対して、フィレンツェの商工業者や小店主層のあいだでは、男子が見習いや徒弟の期間を終えて雇主や親方から独立し、自分の世帯を構えることができた年齢が30歳前後であったためであろう。なお、都市の下層民のあいだでは男女ともシングルの割合が他の社会階層よりも多く、また、結婚と同棲の境界もあいまいであった。一般に、上層階層の女性は、下層階層の女性よりも結婚の機会が多く、また若い年齢で結婚した。同年のカタストに記されているフィレンツェの上層階層の女性の約91%が、20歳にはすでに結婚していたが、下層民の女性で同年齢までに結婚していたのは約87%である⁽¹²⁾。上層階層の女性で結婚しなかった者の多くは、女子修道院に入ったが、下層階層のシングルの女性の場合は、織布工や召使いなど何らかの仕事に従事しつつ生活していた。さらに、フィレンツェの夫婦のあいだには平

均して約12歳の年齢の差があったので、寡婦になる女性も多かった。1427年にフィレンツェで生活していた女性の約10%は40歳までに寡婦になり、60歳以上になると女性のほとんど半数が寡婦であったと分析されている⁽¹³⁾。

農村については次節で考察することにして、それでは、単純世帯を構成するフィレンツェの中下層の家族は、具体的にどのような生活を営んでいたのだろうか。14世紀から15世紀にかけてのフィレンツェの経済的推移と中下層民へのインパクトを概観してみよう。ここで、1427年のカタストから得られるフィレンツェとトスカーナ地方の住民の世帯の規模が、はたして1世紀前の時代と全く同じであったのかという疑問が生じるであろう。しかし、カタストのような包括的なデータは、以前の時代には存在しない。参考として、フィレンツェに最も近い小都市であったプラートの1339年のデータによると、当時のプラートの世帯の規模の平均は3.9人で⁽¹⁴⁾、約1世紀後のフィレンツェとそう変わらない。したがって、平均的な世帯の規模に関しては、14世紀から15世紀にかけてそう大きな変化はなかったものと見做して、議論を進めたい。

14世紀のフィレンツェの経済史は、やはり1348年の黒死病を転換点としてそれ以前の時代と以後の時代に区分される。黒死病以前の時代、すなわち、14世紀の前半は、それまで繁栄していたフィレンツェの経済が徐々に陰りを見せる時代であった。フィレンツェは絶え間ない政変と周期的な飢饉の脅威にさらされた。同市における小麦の価格は1309年から1347年までの間に徐々に上昇し、1311年と1322年から1323年、1328年から1330年、1339年から1341年、そして1346年から翌年にかけてと、全部で5回にわたる小麦の価格の高騰が起こっている。1329年には小麦の価格は1スタイオ（約24.362リットルに相当）66ソルドであったが、1347年には80ソルドに上昇している⁽¹⁵⁾。

このような小麦の価格に代表される物価の上昇は、都市の中下層民の生活にどのような影響を及ぼしたのであろうか。建築業の日雇い労働者を例に挙げると、彼らのひと月分の賃金は当時97ソルドであった⁽¹⁶⁾。ひと月といっても、建築労働者はひと月に平均21日間労働するのが最高で、冬は仕事が減少した。し

しかし、この賃金の価値は、労働者が家族を持っているか否かで変わってくる。というのは、独居者の1カ月あたりの生活費は約78ソルドであったが、夫婦と2人の子どもから成る世帯では、1カ月あたりの生活費は177ソルドになったからである⁽¹⁷⁾。つまり、建築労働者の賃金は自分自身を扶養するだけで精一杯の金額でしかなかったのである。フィレンツェにおいて独居者の割合が比較的高かった背景には、このようなシングルの男性労働者の存在がある。

一方、都市の労働者層のあいだにも、家族を持っている者は多くいた。この階層の世帯では、夫だけが働いていたのではない。妻もまた、夫とともに生計を支えていた。フランコ・サケットティの『三百話』*Trecentonovelle*の第192話に、画家のボナミーコが、隣に住む打毛工の妻が夜明け前から紡ぎはじめる糸車の音に安眠を妨げられて迷惑し、愉快な報復をする話がある⁽¹⁸⁾。この妻は、冬になると自分の家で上質の羊毛の紡績をおこなっていた。このような働く妻の例は、この階層のあいだでは珍しくなかったにちがいない。また、中層のカテゴリーに入る手工業者や小店主の階層でも、妻が夫とともに工房や店を切り盛りするのが普通であった。フランチェスコ・ダ・バルベリーノは10項目にわたる女性の職業をリストにしているが、そのうちの半分はパン屋や果物販売人、鶏屋や粉屋など食品関係の小売商であり、そのほかには宿屋や床屋、服飾商、織布工が挙げられている⁽¹⁹⁾。また、乳母や下女、召使い、洗濯女なども女性の仕事であった。ゆえに、妻が労働に従事していない世帯は、この時代は都市の上層階層の世帯に限られていたといえよう。

一般に、夫婦が共に生計を支えていた都市の中下層の世帯では、子どもが生まれると農家に里子に出された。母親が子育てをするのではなく、住込みの乳母を雇ったり農家に里子に出したりして子どもを養育させることは、当時の都市では一般的な慣習となっていたが⁽²⁰⁾、この慣習は社会階層によって異なった必要性から受容されていた。すなわち、上層階層のあいだでは妻ができるだけ多くの妊娠と出産に従事するためであったが、中下層のあいだでは妻が労働に従事するためであった。里子に出された子どもは、普通は5歳から6歳ぐらい

になると親元に戻された。その後は親の手伝いをしながら仕事を覚えていく子どももいれば、都市内のさまざまな業種の親方のもとに丁稚や見習いとして奉公に出される子どももいた。下層民の女兒の中には、召使いとして上層階層の家に雇用され、結婚適齢期になると雇主が結婚相手を見つけ、給金代わりの嫁資を出して女兒を結婚させるという家内奉公の形態も存在した⁽²¹⁾。このような場合には子どもが奉公に出るときに親子関係が切れてしまうことも多かったので、親にとって一種の口減らしの方法になったであろう。また、妻子の労働のほかに、夫自身が複数の仕事に従事している場合もあった。さらに、生計に少し余裕のある世帯は小区画の土地や菜園を購入または賃借りし、そこで育てた作物を自らの世帯の食物としたり、あるいは、消費しきれない分を売ったりして生計の足しにしていた⁽²²⁾。都市の中下層の世帯はこのような多様な手段で生計を立てていたのであるが、彼らの生活は決して安定したものではなかったといえる。というのは、1328年から翌年にかけて大飢饉があり、1340年代は不況と飢饉とこれらに起因する物価の高騰といった14世紀最大の危機の時代となったからである。ド・ラ・ロンシエールはフィレンツェで最大の施療院であったサンタ・マリア・ヌオーヴァ施療院の帳簿を史料として、14世紀に同施設に雇われていた庭師と石工、人足の賃金と生活状況について明らかにしている⁽²³⁾。彼の分析によると、庭師のカテゴリーでも、また石工や人足——前者の方が後者より高い賃金を得ていた——のカテゴリーでも、シングルの男性は1340年から1347年までの期間以外は暮らし向きは苦しいものではなかった。しかし、家族を持つ男性にとっては、すでに1326年以降生活が困難な状態が続いていたようだ。とりわけ、子だくさんの夫婦や子どもがまだ小さく、妻が病気などで働けない場合には、家族が生存の危機に直面し、夫が物乞いに訴えざるをえない事態に陥った。

さて、1348年の黒死病に起因する人口激減によって賃金が飛躍的に上昇し、労働者の生活は危機的な事態を免れることになった。庭師の賃金は、1340—47年のそれを100とすると、1350—56年には236に、1378—81年には293に上昇して

いる。人足についても同様に1340—47年の賃金を100とすると、1350—56年には400にも昇っている⁽²⁴⁾。賃金の上昇は女性の職種にも見られる。女性の織布工の賃金は黒死病以降はそれ以前の約3倍になり、召使いの月給も1340年代は21ソルドであったのに対して、1350年代には51ソルドに上昇している⁽²⁵⁾。黒死病は労働者層にとって、一時的な好景気を引き起こしたといえるだろう。しかし、この好景気も20年以上は続かず、1366年から1378年までの間に毛織物工業の景気が後退し、1371年以降は対教皇庁戦争とも関わった賃金の低下と物価の上昇、失業などのために、労働者層にとっては再び生活が困難になった。1378年にフィレンツェで起こったチョンピの反乱の背景には、このような経済状況が関係している。また、1384年から1393年の間も不況の時期で、労働者の賃金は先の10年間の3分の1になってしまったといわれている⁽²⁶⁾。

1348年の黒死病は労働者の賃金上昇の契機にはなったが、同時に、当時のフィレンツェのさまざまな社会階層の家族にとってネガティブな結果をも引き起こした。それは、ペストによって世帯主を亡くした家族の混乱である。黒死病の後の時代には世帯主が死亡した家で財産相続に関する訴訟が頻繁に起こされた。最大の社会的弱者となったのは寡婦と孤児で、彼らは法的には無能力であると見做されていたために、財産に関する自らの権利を守るべく公的な手続きを起すには男性の法的代理人を立てなければならなかった。このような不便のために、寡婦や孤児は、ともすれば親族に財産を奪われてしまったのである。フィレンツェの都市政府は、このような状況に対処すべくふたつの救済策を打ち出している。ひとつは、孤児と寡婦の法的立場を強くするために、当時のフィレンツェで最大の慈善のための兄弟会であったオルサンミケーレの長官capitanoが孤児や寡婦の財産や嫁資に関する文書の証人になるという策で、これによって親族のあいだに法的代理人を見出すことのできない者でも財産を失う危険を免れた。また、もうひとつは、都市政府を通じて、同じオルサンミケーレの兄弟会の基金が孤児と寡婦の財政的援助のために用いられたことである⁽²⁷⁾。

1348年の黒死病のネガティブな結果を打開するべくフィレンツェ政府がオルサンミケーレの兄弟会と連帯しておこなったもうひとつの救済策は、貧しい少女のための嫁資の援助である⁽²⁸⁾。この策には、結婚を奨励しペストで激減した人口を回復しようというフィレンツェ政府の意図が反映されている。嫁資の問題に関する政府の関心は15世紀になっても持続し、1425年には政府によって嫁資基金 Monte delle Doti が設立されている⁽²⁹⁾。この時代にも、人口復興のために、国家による結婚の奨励がおこなわれており、都市政府は家族を、国家を支える重要な単位と見做していたのである。

さて、15世紀について概観すると、この世紀は前世紀よりも概ね生活水準が高かったといえるが、周期的な飢饉やペストは起こっていた。15世紀前半はフィレンツェ政府は戦争に明け暮れて財政難に瀕していたが、同世紀の中葉から1490年代までは比較的平和な時代であった。とはいえ、労働者層の生活はかならずしも安定していたわけではない。この時代、人足は1年に130リラ——1リラは20ソルドに相当——、石工は175リラから200リラの賃金を得ていた。シングル男性であれば生活に余裕があったが、夫婦と2人の子どもを持つ世帯では、世帯主は1年に210リラを稼がなければ生活が安定しなかったといわれている⁽³⁰⁾。労働者の世帯の生活状況は、実質的には14世紀とそれほど変化しなかったのである。子だくさんの夫婦や夫婦のどちらかが病気になったりすると、生活はたちまち困難になり、一家が離散する危機に陥る可能性は絶えず存在していた。

しかし、14世紀と15世紀を比較すると、フィレンツェの住民のあいだにきわだったひとつの変化を見出すことができる。それは、15世紀にはトスカーナ地方以外の「外国人」forestiere の移住者が増えたことである。フィレンツェでは15世紀の中葉以降人口がやや増加しはじめ、1427年には約37,000人であったのが1480年代には約40,000人となっている。ゆえに、同市の外からの人口流入も人口増加に貢献したと考えられる。「外国人」の移住者は性別によって出身地と職業の差異が見られる。男性の「外国人」で最も多かったのは「ドイツ人」の

織布工で、1380年にはフィレンツェの織布工全体の約11%であったが、1405年には34%に、そして1430年と1455年には55%に達している⁽³¹⁾。彼らは概ねフィレンツェに定住していた層であろう。「ドイツ人」の織布工がどのような家族を形成していたのかについては不明であるが⁽³²⁾、彼らは15世紀に4つの兄弟会を創設していた⁽³³⁾。兄弟会は、彼らのあいだに社会的なネットワークを形成するうえで重要な機能を果たしていたにちがいない。また、15世紀には「ドイツ人」だけでなく、ネーデルランド人の織布工やジェノヴァ人の兄弟会が存在したことも確認されている⁽³⁴⁾。一方、女性の「外国人」の中で際立っているのは、南スラブ系の女奴隷や下女である。1445年に開設されたフィレンツェのインノチェンティ捨児養育院の記録には、このような地域出身の女性の子どもが入所者として頻繁に記されている⁽³⁵⁾。彼女たちは、「外国人」男性とは異なって、家族を持つことがまれであったと推測される。また、娼婦のほとんどは「外国人」であった⁽³⁶⁾。しかし、このような「外国人」は1490年代になって、不作と、ロレンツォ・デ・メディチの死からはじまりサヴォナローラの支配と失脚へと続く政治的混乱、そしてペストとチフスに梅毒を加えた疫病の複合的な波がフィレンツェに押し寄せてきたとき、政府によって同市からの排除の対象とされることになるのである⁽³⁷⁾。

以上考察してきたように、14—15世紀のフィレンツェで最も多かった世帯構成は労働者層を中心とする夫婦共働きの単純世帯で、この社会階層の家族の生活は常に潜在的な貧困の危機を内包しており、飢饉や疫病といった災害によって、あるいは、失業や子だくさんなどの社会的要因によって容易に一家離散に見舞われえた。寡婦になる確率も高く、また、子どもが幼い年齢で奉公に出されたために、もはや親子関係が維持されなくなることもあった。このような側面を考慮するならば、家族の全員が共に生活しえた期間は、現代の家族と比較するとはるかに短かったと考えられるであろう。

Ⅲ. トスカーナ農村の家族

トスカーナ地方の農村部でも、社会の上層において世帯の規模がより大きくより下層になるほど小さくなる傾向が見られるが、この傾向は都市におけるほど顕著ではない。農村部で特徴的なのは、分益小作人 *mezzadro* の世帯である。1427年のカタストにおいて6人以上から成る農村の世帯は分益小作人のあいだで最も多い。4人以下の世帯は、課税対象となる資産を持っていなかった他の貧しい農民——分益小作人ではない小作人や貧しい自営農民——のあいだでは約35%であるのに対して、分益小作人のあいだでは約20%と、より少なくなっている⁽³⁸⁾。分益小作人の世帯では、労働力を確保するために子どもが大きくなっても親と同居する傾向があったのだろうか。まず、そもそも分益小作制とは何か、また、どのような状況のもとで普及していったのかについて見ていこう。

トスカーナ地方は、全領域の約3分の2までが丘陵地帯によって占められ、約5分の1はこの地方の北部と東部にまたがる山岳地帯で、平野部は全領域の約10分の1に相当する。トスカーナ地方の農村では、13世紀の後半から14世紀の初頭にかけて都市コムーネが司教や封建領主層から裁判権を奪取し、教区を行政単位とした領域支配を展開していく⁽³⁹⁾。この時期に、あるいは、それ以前の時期に、すでに都市に移住し都市の上層階層の中に入り込んでいた農村の有力地主層は、都市に移住した後も出身地の農村との関係を保ち続け、土地所有を強化していった。また、都市民でありながら裕福になって農村の土地を購入し、地主化する者もいた。一方、農村では都市の領域支配に伴って、自営農民の両極分解が起こっていく。比較的富裕な農村住民は都市に移住し、都市に生活の基盤を置くようになる。しかし、貧しい農民は自らの土地を手放し、小作人になるか、無産の日雇い労働者として都市や農村の集落を転々とするようになった。

このような、一方では都市民による農村の土地所有、他方では自営農民の小

作人への転落が進行している状況に対応して出現したのが分益小作制 *mezzadria* である。分益小作制とは、コンパクトな農地 *podere* を持つ地主が、小麦、ブドウ、オリーブなどの栽培に関して、小作人と2年から5年程度の比較的短期間の契約を結び、収益を両者のあいだで折半する農地経営の形態である。小作人にとってのメリットは、住居と農具、家畜などが地主から貸与されることと、農地がコンパクトで住居に近いことであった。また地主は、不作や飢饉、災害や事故などによる損失、小作人の家族の病気や死に際して、小作人から頻繁に負債を請われた。こうした場合、地主は小作人の申し出をしばしば受け入れて、収穫の時期まで負債の返済を待ったり、金を貸したりした。それゆえ、分益小作制のもとでの地主と小作人との関係は、パターン的な色彩が強い。分益小作制は短期間の契約なので、契約が終了するとその土地を離れ、別の地主と新たな契約を結ぶ者もいた。分益小作人の中には一生のうちにいくつもの農村集落を転々とした者も多い⁽⁴⁰⁾。

分益小作制は、都市民が比較的土を手に入れやすかった都市の周辺から普及をはじめ、15世紀にトスカーナ地方でドミナントに見られるようになる。1427年のカタストの時点では、分益小作農は農村の世帯全体の約18.9%で、自営農が約56.6%と最も多く、農地と住居を貸与する側にあった比較的裕福な世帯は約4.3%となっている⁽⁴¹⁾。当時のフィレンツェ共和国の領域内で分益小作制が普及していたのは、フィレンツェの周辺領域 *contado* と南西部の諸教区、エルサ川流域とムジェッロ地方であった。一方、カゼンティーノ地方やピストイア北部のような山岳部とティレニア海沿岸の湖沼地帯は農業には不向きで、放牧が主要な生産活動となっていた。しかし、1469年までに分益小作農はフィレンツェのコンタードの全農村世帯の約30%にまで増加し⁽⁴²⁾、さらに16世紀の初めにはキアンティ地方やプラート北部の丘陵地帯においても広がってきている⁽⁴³⁾。だが、分益小作制の普及によって、自営農民がいなくなったわけではない。自らの土地を持ちながら、分益小作人をも兼ねていた農民もいた。1427年のカタストに分益小作人と記されている者たちの約4分の1は、自分の所有地

を持っている⁽⁴⁴⁾。また、自営農民が小作人よりも裕福であったとはかならずしもいえない。ゆえに、農村の社会階層は、都市の社会階層のように明確には区別しがたい。一般に農村の世帯でも、都市の中下層の世帯と同様に、夫だけでなく家族の全員が労働に従事していた。農婦は農作業や家事のほかに紡績や機織り、家畜の世話や里子の養育に従事し、子どもたちも親を手伝いつつ仕事を学んでいった⁽⁴⁵⁾。なお、農村では、乳幼児を乳母の手で養育させる習慣はなかった。

さて、14—15世紀における経済的な推移、とりわけ飢饉や疫病は都市だけでなく農村にもさまざまな影響を与えた。14世紀後半から15世紀の最初の数十年間にかけて、トスカーナ地方では人口減少と過疎、そしてこれらに伴う耕地の牧草地化、森林や未開墾地の拡大といった現象が見られる。14世紀から15世紀までの2世紀間にトスカーナ地方全体の10%にも及ぶ村落が消滅した⁽⁴⁶⁾。過疎化が特に目立つ地域は、フィレンツェ共和国の領域の西部と南東部、そして山岳地帯である。農村の貧困は1364年以降顕著になる。フィレンツェのコンタードであるサント・スピリト地区に関するド・ラ・ロンシエールの分析によれば、1364年と1371年のエスティモ——フィレンツェ共和国の支配領域に教区を単位として課せられていた直接税——に「資産を持たない者」《*nihil habentes*》として記されている者はこの地区の全世帯主の約46%であったが、1383年には53%に増加している。これが「小作人」*laborator*の階層になると、「資産を持たない者」は1371年には小作人の全世帯のうち約66%であったのが、1383年には約73%と、彼らのあいだで貧困化が顕著であったことが確認される⁽⁴⁷⁾。このような農村の過疎と貧困化と関わって、1364年から1371年までの期間には農村からフィレンツェへ向けての貧しい移住者の流入が見られる。これらの移住者の資産は、それ以前の時代の移住者と比較すると半分程度であった⁽⁴⁸⁾。貧しい農民は、周期的な疫病の発生によって人口が減少した都市が提供する雇用の可能性に引き寄せられたのである。

このような農村における推移を、農村の家族に関するいくつかの事例を通し

て考察してみよう。

ド・ラ・ロンシエールは、フィレンツェ国立古文書館に保存されている公証人文書 *registri notarili* を史料として、エルサ渓谷のチェルタルドの近郊に位置する農村集落ペトロニャーノの1280年から1360年までの80年間における住民の世帯の再構成を試みている⁽⁴⁹⁾。この集落には1338年に90世帯から100世帯が存在し、住民の大多数は自営農民と分益小作人であったが、1世代につき20人ほどの商工業従事者が見出される⁽⁵⁰⁾。1348年の黒死病以前には、エルサ渓谷はトスカーナ地方の中でも豊かな地域で、カステルフィオレンティーノ、ポッジボンシ、サン・ジミニャーノ、コッレといった小都市が繁栄していた。比較的多い商工業者の存在は、この集落が都市化しつつあったことを示唆している。ペトロニャーノからフィレンツェに赴く者も珍しくなく、1290年から1348年までの期間にこの集落の41人の若者が手工業の技術の修得のために、フィレンツェに移住している⁽⁵¹⁾。この集落とフィレンツェとの地理的に近い関係が、この集落の都市化を促したとも考えられるであろう。

さて、ド・ラ・ロンシエールは1270年から1330年までの60年間にペトロニャーノに見出される164組の夫婦について分析し、これらの夫婦が主として単純世帯を形成していたこと、12歳から14歳に達する子どもの数の平均が夫婦一組につき約3.2人であったことを明らかにしている⁽⁵²⁾。夫婦と3人以上の子どもから成る世帯は、1427年のカタストのデータから得られる農村の平均的世帯である5人の世帯よりも多人数であったことを推測させる。そして、この164組の夫婦から生まれた子どものうち約60%が結婚している⁽⁵³⁾。結婚してはじめて息子が父親から独立した共同体のメンバーと見做されたこと、未婚の子どもとその母、すなわち家族全員に対しては父親が法的権限を持っていたこと、夫の死後遺言によって妻が14歳以下の子どもの後見人として指名されることがあったことなどは、都市の家族と共通する側面であるが、興味深いのは、息子たちの職業の選択に関してかならずしも世襲制が貫徹されていなかったことである⁽⁵⁴⁾。分益小作人の息子が靴製造職人やフラスコ製造職人などの手工業者に

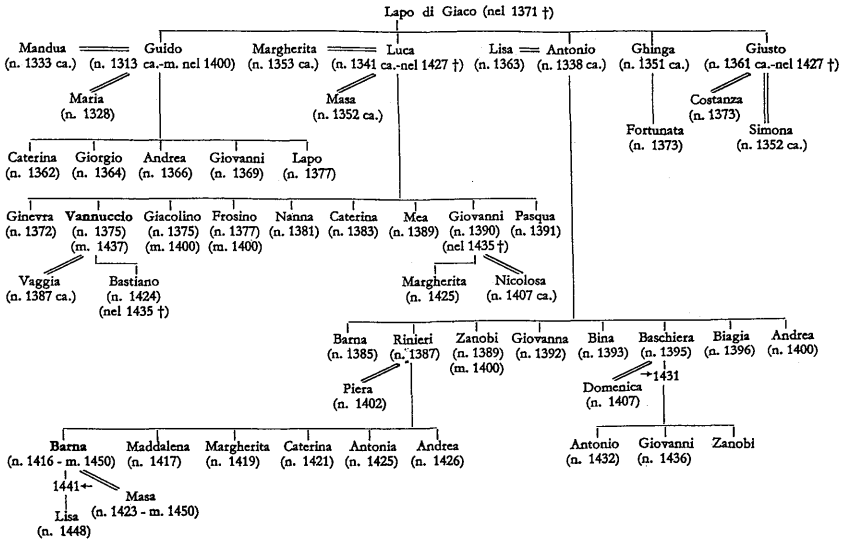
なる場合もあれば、逆に、公証人や薬種商の息子で農夫になる者もいた。しかし、父親と異なる職業についても、家族関係が消滅することはなかった。父親の死後も息子たちの結束は維持され、近隣に居住したり共同で借りている土地で互いに助け合ったりした。兄弟関係は、係争の仲裁や後見人、契約の証人や保証人などの役割を互いに担うことによって維持された⁽⁵⁵⁾。

また、このペトロニャーノの90から100に及ぶ世帯のうち7つの家系については、1280年から1360年までの間に4世代から6世代にわたる再構成が可能であり、この7つの家系の中で最大規模のものは88人のメンバーを有し、最も小さな家系でも23人のメンバーが存在した⁽⁵⁶⁾。主要な家系は、都市におけるのと同様に、婚姻を通して結ばれていた。第5親等の親族同士の婚姻も見られる⁽⁵⁷⁾。このような集落内の有力者のあいだでは、同じ家系に属していることがその家のメンバーの誇りとなり、結束の基盤となっていた。このような側面も都市の上層階層と共通する要素であろう。ゆえに、このペトロニャーノの事例から、1348年の黒死病以前のこの地域の農村では都市化がすすみ、家族関係について都市と類似した要素が観察される。

ところが、1348年の黒死病によって農村においても人口が激減する。ペトロニャーノにおいても1327年には92世帯が存在したのに対し、黒死病後の1350年には38世帯と半数以下に減少している⁽⁵⁸⁾。ペストによる死に加えて、他所へ移っていった住民もいたであろう。そして、次の世紀になると、農村共同体の自立性が失われていく。この過程を、マッツィとラヴェッジの研究から考察してみよう。両者は、公証人文書やさまざまな契約文書、カタストなどの史料を用い、フィレンツェ共和国の農村に生活していた6つの家系を14世紀と15世紀の2世紀間にわたって跡づけている⁽⁵⁹⁾。これらの事例から、時代の変化の影響が最も顕著に反映されている例を取り上げ、家族の状況を再構成してみたい。

デル・ペッレ家は、エルサ渓谷のチェルタルドに近い農村集落メタータの富農で、5世代で40人のメンバーを数える大きな家系であった。メタータは12世紀末から13世紀の間にフィレンツェに従属した地域に属し、14世紀には自作農

図1 デル・ペッレ家の家系図



注：n は誕生年、m は死亡年、+ はその年までに死亡

Mazzi, Maria Serena e Raveggi, Sergio, *Gli uomini e le cose. Nelle campagne fiorentine del Quattrocento*, Firenze 1983, p. 243.

も少なくはなかった。メタータにデル・ペッレ家の存在が確認されるのは、1357年である。第1世代の家長ラーポにはすでに4人の息子とひとりの娘がいた。1364年のエスティモではこの家は400リラの資産を持ち、メタータの教区に課された税の3分の1以上を割り当てられている⁽⁶⁰⁾。1371年にラーポが死ぬと、長男のガイドが家長となり、次男のルカはメタータの村長 *rettore* に選出されている。また、家のメンバーも1371年に9人であったのが、1384年には13人、1393年には21人に増えている。1393年のエスティモによると、デル・ペッレ家は1,000リラの資産を持ち、18リラの税が課せられている。一方、同じメタータに居住している他の7つの家のエスティモ税は最低が3ソルドで、最高でも14ソルドであった⁽⁶¹⁾。デル・ペッレ家が当時この集落において最も豊かで

有力な家系であったことが、割り当てられた税額の高さから推測されよう。

1401年のエスティモに申告されているデル・ペッレ家の資産は500フィオーリーノ⁽⁶²⁾に達したが、そのうち主要な不動産は全部で119スタイオラ（約24ヘクタール）になる3つの農地であった。家長のガイドはすでに1400年のペストで死亡していた。ガイドの5人の息子たちはいずれも未婚のままである。ラーポの次男のルカには4人の息子と5人の娘がいたが、息子のうちの2人が1400年のペストで死亡している。残りの兄弟のうち結婚したことが確認されるのは、ヴァンヌッチョとジョヴァンニのみである。ラーポの三男のアントニオには5人の息子と3人の娘（あるいは、4人の息子と4人の娘⁽⁶³⁾）がいたが、三男が1400年のペストで死亡し、2人の息子リニエリとバスキエラが結婚する。ラーポの末子のジュストは、ガイドやルカと同様に二度結婚しているが、子どもはいない。これらのメンバーがどのような世帯に分かれて居住していたかについては、史料からは不明である。なお、1401年の時点で、この家には負債があったことが確認されている。負債は、ガイドの寡婦への嫁資の返還——彼女は夫の死後実家に戻った——に当てられた142フィオーリーノと他の負債20フィオーリーノから成っていた。また、この時期デル・ペッレ家は初めて農地を売却している。この農地はある富裕なフィレンツェ人に217フィオーリーノで売却された⁽⁶⁴⁾。ここで、このメタータの富農の家もまた、都市民による農村の土地への投資と分益小作制の進展という現象に取り込まれていったことが認められるだろう。

次の1412年のエスティモでは、デル・ペッレ家の没落の兆候が現れはじめている。ラーポの4人の息子たちはすでに分かれて居住していたが、それぞれの世帯のメンバーは高齢化し、未成年の子どもはいなかった。彼らは各自が相続した農地を所有していたが、1401年のエスティモに申告され、長男ガイドの2人の息子アンドレアとラーポ（祖父と同名）が相続した土地は半分になっており、残りの半分はフィレンツェ人の絹の織布工 *tessitore di drappi* に売却されている⁽⁶⁵⁾。都市民による農村の土地への投資と在地の自作農の所有地の侵食が

ますます進行していたことが推測される。

1427年のカタストにはデル・ペッレ家は3世帯、すなわち、ガイドとルカとアントニオの3兄弟の子孫の名で登場する。しかし、ガイドの息子たちには子どもがなく、ルカの息子たちについても2人が結婚したが、この2組の夫婦には1人ずつしか子どもが生まれなかった。アントニオの息子たちのあいだではリニエリとバスキエラが結婚し、それぞれ1男5女と3人の息子を持っている。3世帯を合わせて15人のメンバーがいたが、そのうち労働しうる男性は4人しかいなかった。資産に関しては、3世帯を合わせて584フィオーリーノと申告され、その内訳は14片の土地と家4戸、1片の森林、5頭の牛と2頭の驢馬から成っていた。だが、その一方で130フィオーリーノの負債と税が記されている⁽⁶⁶⁾。

デル・ペッレ家の没落は、1427年から1435年までの間に急速に進行する。この8年間に新たに生まれたのはバスキエラの長男のみである一方、死者は11人にもなった。1435年のカタストでは、デル・ペッレ家は2世帯7人のみとなっている。バスキエラは父から相続した小片の土地を所有し、これを1年に10フィオーリーノで賃貸していたが、この収入だけでは生活が困難なために分益小作人となっている⁽⁶⁷⁾。自らの地所を賃貸し、同時に他者の土地で働く者が一族の中に現れたことは、この時代の在地の自作農の解体を意味しているだろう。一方、ルカの長男であったヴァンヌッチョは比較的裕福であったが、彼は1435年にひとり息子を亡くしたので、従兄のバスキエラとその甥バルナに財産を相続させている。バルナは1441年に結婚したが、彼の妻がもたらした嫁資は30フィオーリーノであった⁽⁶⁸⁾。嫁資は家の経済的・社会的ステータスを測る指標であった。第2世代の長男ガイドの妻が寡婦になったとき、返還された嫁資の額である142フィオーリーノと比較すると、デル・ペッレ家の繁栄がもはや過去のものになってしまっていたことは否めない。

このバルナは妻とともに1450年のペストの犠牲者となり、2歳になるひとり娘のリーザを残して他界する。デル・ペッレ家の親族としてはバスキエラの3人の息子たちがいたが、いずれも未成年でリーザの後見人にはなりえなかつ

た。結局、リーザの母方の伯父セル・サンティが彼女の後見人となった。セル・サンティの父は15世紀の初めにメタータに移住してきた小自作農であったが、息子はフィレンツェに移住し、公証人として成功した。彼はリーザを引き取って扶養し、彼女の嫁資として嫁資基金に50フィオーリーノを入金する傍らで、リーザの財産を我が物としてしまう⁽⁶⁹⁾。

一方、デル・ペッレ家のもうひとつの脈であるバスキエラの子孫たちもまた、不運な離散を余儀なくされることになる。長男のアントニオは、1454年には絹の織布工となって他所へ移っていた。メタータには次男のジョヴァンニが留まり、1401年のエスティモに記載されていた3つの農地のひとつを相続していたが、この土地はすでに3分の1に縮小されていた。さらに追い打ちをかけるように、彼は自分の母親とヴァンヌッチョの妻のふたりから嫁資の返還を要求される。1464年には、アントニオと彼の末の弟ザノビはメタータの近郊で生き延びていたが、1471年のカタストにはデル・ペッレ家のメンバーはもはや確認されなくなってしまう⁽⁷⁰⁾。第1世代のラーポの死から1世紀のうちに、かつての農村集落の富農は完全に消滅してしまうのである。

デル・ペッレ家はなぜこのような没落に陥ったのであろうか。それは、負債の累積や頻繁な嫁資の返還といった財政的要因に加えて、疫病と、家産の分散を防ぐために息子たちの結婚が制限されたことが、この家の子孫を減少させ、その結果家の衰退を促したことにある。そのために、かつて存在した家の結束は失われ、一族は離散を余儀なくされた。また、自作農の家が所有地に固執している一方で、都市民による農村の土地への投資が進展していったことも要因として挙げられる。自作農の土地は、負債などを契機として都市民に侵食されていった。一方、セル・サンティのように、若くして農村を離れ都市に移住した者には、事業に成功し、農民の場合とは比較にならないほどの富を手に入れる可能性があった。1469年のフィレンツェのカタストにおけるセル・サンティの不動産の申告は2,370フィオーリーノに達し、これらの不動産はメタータのほかにインプルネータやチェルタルドにも散在していた⁽⁷¹⁾。彼のように農村の出

身でありながら1世代でこのような資産を手に入れた者は希有であったかもしれないが、農村に留まり続けたデル・ペッレ家の末裔たちとは非常に対照的な結末であるといえよう。

このような事例を通して、14世紀の後半から15世紀にかけてトスカーナ地方の農村では大きな自作農の家系が自立性を失い、結婚の制限による子孫の減少とともに没落していったことが推測されるだろう。この過程は、ますます進行しつつあった都市市民による農村の土地への投資と分益小作制による農地経営の背後で起こっていた。フィレンツェのような大都市への富の集中化は、それまでの農村の経済を侵食しながらすすめていったのである。都市の世帯の構成が14世紀と15世紀を通してそれほど大差がなかったように思われるのに対して、農村では明らかな人口減少と貧困化が見られる。分益小作人の世帯の規模が他の農民のそれと比較して大きいとしても、このことは決して世帯の豊かさを反映しているわけではない。むしろ貧困に対処するために、できるだけ多くの労働力を世帯の中に確保しようとする自衛策であったと考えられるだろう。農村の家族は都市経済と都市市民の資本に取り込まれ、変容していかざるをえなかったのである。

IV. むすび

14世紀から15世紀にかけてのトスカーナ地方では、都市においても農村においても単純世帯がドミナントであった。しかし、家族の生活状況は都市と農村、あるいは社会階層によって異なっていたし、またこの2世紀間に変化していった。この変化を考察するうえで、1348年の黒死病はやはり転換点になっているといえよう。

1348年以前のトスカーナ地方では、フィレンツェのほかに中小規模の諸都市が繁栄し、農村においては比較的富裕な家は都市に引きつけられ、都市に移住するメンバーがいる一方で、農村に留まりメンバー間の結束を保ちながら自営農を続ける家もあった。農村の出身で都市に移住した富裕な階層は、都市にお

いて上層階層の中に入り込める可能性があった。しかし、都市民の生活は黒死病以前は不況や飢饉、物価の高騰のために不安定で、中下層民だけでなく上層の世帯でも、事業の倒産などの不運に見舞われると、困窮状態に陥ることがあった。

黒死病による人口激減は都市にも農村にもそれまでの生活を覆すような変化をもたらした。フィレンツェでは労働力不足のために賃金の一時的な上昇が起こり、中下層民の生活は以前の時代と比較してやや余裕のあるものになった。とはいえ、家族を持つ者は貧困の脅威から免れていたわけではない。黒死病以前の時代と同様に、1370年代から15世紀にかけての時代においても、子だくさんや失業、病気などが家族の生活を脅かす要因となっていた。一方、農村では、人口激減のために14世紀の後半から15世紀にわたって荒廃が徐々に進行していく。その過程で、中小諸都市の衰退、都市民の農村の土地への投資と益分小作制の普及、かつては比較的裕福であった自営農の没落、農民全体の貧困化といった現象が同時に進行している。こうして、フィレンツェへの富の集中化が顕著になっていったのである。同市では15世紀に入ると、上層市民層が突出した富を持ち都市貴族化していく一方で、下層の労働者の中には「外国人」の増加が確認されるようになる。この現象は、社会階層の分化が14世紀よりも進んでいることを反映しているだろう。当時のフィレンツェの社会階層はちょうど上層市民層を頂点とし、下層にいたるほど雑多で人口が多いピラミッド型の構成になっている。

このような状況を家族という視点から眺めてみるとどうであろうか。農村では15世紀には結婚して家族を持つことが困難になっていったし、都市の中下層民の生活はシングルには比較的余裕があるが、家族を持つ者にとってはたえず貧困の脅威が存在した。フィレンツェ共和国の政府が黒死病後の時代に、人口増加をめざして結婚奨励の政策に力を入れ続けたことは、当時生活の不安なりに家族を持つことがいかに困難であったかを反映しているのではないだろうか。

なお、農村部よりも人口が少なく、主要な家産が家畜で、富裕な階層と極貧層の不在を特徴とする山岳地帯の住民⁽⁷²⁾については、本稿で考察することができなかった。また、農村から都市への移住に関しては本稿でも触れたが、1348年の黒死病以降は農村の集落から集落への移住も顕著になる⁽⁷³⁾。この農村における人口移動は、これまで注目されなかった重要な視点であろう。これらの問題に関しては、筆者の今後の研究課題としておきたい。

注

- (1) ピータ・ラスレット (川北稔他訳)『われら失いし世界——近代イギリス社会史——』三嶺書房、1986年(原著初版、1965年)、同「家族と世帯への歴史的アプローチ」二宮宏之他編『家の歴史社会学』新評論、1983年(原論文初出、1972年)、37-76ページ、大黒俊二「ヨーロッパ家族史へのふたつのアプローチ——イタリアからの視点——」前川和也編『家族・世帯・家門——工業化以前の世界から——』ミネルヴァ書房、1993年、14-41ページ。
- (2) Herlihy, David & Klapisch-Zuber, Christiane, *Tuscans and Their Families. A Study of the Florentine Catasto of 1427*, New Haven-London, 1985 (原著初版、*Les Toscans et leurs familles. Une étude du Catasto florentin de 1427*, Paris 1978), p. 292. 清水廣一郎「家と家とを結ぶもの——中世末期イタリアにおける嫁資について——」『イタリア中世の都市社会』岩波書店、1990年、214ページ。カタストとは、フィレンツェ共和国が度重なる戦争のために深刻になった財政難の打開策として1427年から導入した新しい税制である。この税制には、聖職者を除外して、当時の同共和国の支配領域に居住していた住民の全世帯主に、各世帯を構成するメンバーと資産を申告させ、世帯ごとに課税額を決定するという方法が採用された。それゆえ、このカタストの記録は、当時のフィレンツェ共和国の支配領域に居住していた家族の構成と経済状況を知るうえで、非常に貴重な史料となっている。
- (3) Herlihy & Klapisch-Zuber, *op. cit.*, pp. 67-69.
- (4) 河原温氏によれば、1330-50年ごろのバリの人口は8-20万人、ヴェネツィア11万人、ジェノヴァとミラノがそれぞれ10万人である。河原温『中世ヨーロッパの都市世界』山川出版社、1996年、35ページ。
- (5) Herlihy & Klapisch-Zuber, *op. cit.*, p. 95.
- (6) *Ibid.*, p. 100, 清水廣一郎「イタリアの中世都市」『イタリア中世の都市社会』、20-21ページ。

- (7) 清水廣一郎、「家と家とを結ぶもの」、159-224ページ、大黒俊二、前掲論文、亀長洋子「中世後期フィレンツェの寡婦像—Alessandra Macinghi degli Strozziの事例を中心に—」『イタリア学会誌』第42号、1992年、80-104ページ、拙稿、「ドナート=ヴェッルーティの『家の年代記』にみる14世紀フィレンツェ市民の「家」」『立命館文学』第504号、1989年、58-72ページ。
- (8) Herlihy & Klapisch-Zuber, *op. cit.*, p. 283.
- (9) Klapisch-Zuber, Christiane, “Household and Family in Tuscany in 1427”, in *Household and Family in Past Time*, ed. by P. Laslett, Cambridge 1972, pp. 276-277, Tab. 10. 6.
- (10) *Ibid.*, p. 277, Tab. 10. 7.
- (11) Herlihy & Klapisch-Zuber, *op. cit.*, p. 210, Tab. 7. 1.
- (12) Klapisch-Zuber, Christiane, “Female Celibacy and Service in Florence in the Fifteenth Century”, in *Women, Family and Ritual in Renaissance Italy*, Chicago-London, 1985, p. 170.
- (13) Henderson, John, *Piety and Charity in Late Medieval Florence*, Oxford 1994, p. 384.
- (14) *Ibid.*, p. 262.
- (15) *Ibid.*, p. 248.
- (16) *Ibid.*, p. 249.
- (17) *Ibid.*, p. 249.
- (18) Sacchetti, Franco, *Il Trecentonovelle*, cur., A. Lanza, Milano 1984, n. CXCII (邦語抄訳、杉浦明平訳『ルネッサンス巷談集』岩波文庫、1981年、第61話)。
- (19) Henderson, *op. cit.*, p. 343.
- (20) Klapisch-Zuber, Christiane, “Blood Parents and Milk Parents : Wet Nursing in Florence, 1300-1530”, in *Women, Family and Ritual in Renaissance Italy*, *op. cit.*, pp. 132-164.
- (21) Klapisch-Zuber, “Female Celibacy and Service in Florence in the Fifteenth Century”, *op. cit.*, pp. 173-174.
- (22) Henderson, *op. cit.*, p. 249.
- (23) de La Roncière, Charles, *Tra preghiera e rivolta. Le folle toscane nel XIV secolo*, Roma 1993, pp. 208-223.
- (24) *Ibid.*, pp. 211, 216.
- (25) Klapisch-Zuber, Christiane, “Women Servants in Florence during the Fourteenth and Fifteenth Century”, in *Women and Work in Preindustrial Europe*, ed.

B. A. Hanawalt, Bloomington 1986, p. 65.

- (26) Henderson, *op. cit.*, pp. 335-336.
- (27) *Ibid.*, pp. 306-308.
- (28) *Ibid.*, pp. 316-321.
- (29) 嫁資基金は、女兒を持つ父親や親族にとって嫁資を作る負担を軽減するために設けられたシステムで、5年、7年半、11年、15年の期間を満期とする4種類があった。嫁資を作る必要のある者は頭金をこの嫁資基金に納めれば、満期のさいに頭金と利息が嫁資として引き出せる仕組みになっていた。Kirshner, Julius & Molho, Anthony, "The Dowry Fund and the Marriage Market in Early Quattrocento Florence", *Journal of Modern History*, 50 (1978), pp. 403-438.
- (30) Henderson, *op. cit.*, p. 365.
- (31) *Ibid.*, p. 399.
- (32) 1427年のカタストでは、フィレンツェに居住する87のドイツ人世帯が確認されている。その他では、フランス人、プロヴァンス人、フランドル人、スペイン人、スラヴ人、ハンガリー人などを合わせた24世帯がいた。Herlihy & Klapisch-Zuber, *op. cit.*, p. 110.
- (33) 1420年に創設された聖カテリーナ兄弟会が、1435年に低地ドイツと高地ドイツの各々の出身ごとに分かれ、さらに1441年に聖ロレンツォ教会に高地ドイツ出身者の新たな兄弟会が創設されている。Henderson, *op. cit.*, p. 428.
- (34) ネーデルランド人の織布工の兄弟会は1436年に創設され、ジェノヴァ人のそれは聖セバスティアーノの信心会である。*Ibid.*, pp. 428-429.
- (35) 拙稿 "I bamibini e i genitori-《espositori》 dello Spedale di Santa Maria degli Innocenti di Firenze nel XV secolo", *Annuario* (Istituto Giapponese di Cultura in Roma), XXV (1992), pp. 47-48.
- (36) Trexler, Richard C., "La prostitution florentin au XV^e siècle : patronage et clientele", *Annales E. S. C.*, XXXVI (1981), pp. 985-988.
- (37) Henderson, *op. cit.*, pp. 403-404.
- (38) Herlihy & Klapisch-Zuber, *op. cit.*, pp. 288-289.
- (39) 都市による領域支配の進展の過程は、武力に訴えた領域拡張以外に、都市が農村の住民と結託して農村領主を退け、都市の裁判権を拡張していくケースや、農村の集落が保護を求めて都市に従属してくるケース、さらに都市が農村領主から領地を購入するケースなど多様であった。なお、都市の領域支配と分益小作制の進展については、Cherubini, Giovanni, *Signori, contadini, borghesi. Ricerche sulla società italiana del basso Medioevo*, Firenze 1974, pp. 63-119と清水廣一郎、「イタリア中

- 世都市の領域支配」『イタリア中世都市国家研究』、59-125ページを参照。
- (40) ド・ラ・ロンシエールは1280年から1360年までのヴァルデルサの農村集落ペトロニャーノの住民の分析から、分益小作人の移動の範囲が5-6村にも及んでいたことを指摘している。de La Roncière, *op. cit.*, p. 78.
- (41) Herlihy & Klapisch-Zuber, *op. cit.*, pp. 115-117.
- (42) *Ibid.*, p. 117.
- (43) Cherubini, *op. cit.*, p. 93.
- (44) Herlihy & Klapisch-Zuber, *op. cit.*, p. 118.
- (45) 分益小作人の農婦については、Piccinni, Gabriella, "Le donne nella mezzadria toscana delle origini. Materiali per la definizione del ruolo femminile nelle campagne", *Ricerche Storiche*, XV, 1 (1985), pp. 127-182.
- (46) Cherubini, *op. cit.*, pp. 172-173.
- (47) de La Roncière, *op. cit.*, p. 201.
- (48) *Ibid.*, p. 203.
- (49) de La Roncière, *op. cit.*, pp. 69-85.
- (50) *Ibid.*, p. 70.
- (51) *Ibid.*, p. 73.
- (52) *Ibid.*, pp. 70-71.
- (53) *Ibid.*, p. 71.
- (54) *Ibid.*, pp. 71-73.
- (55) *Ibid.*, pp. 77-78.
- (56) *Ibid.*, p. 70.
- (57) *Ibid.*, p. 79.
- (58) de La Roncière, *op. cit.*, p. 136.
- (59) Mazzi, Maria Serena e Raveggi, Sergio, *Gli uomini e le cose. Nelle campagne fiorentine del Quattrocento*, Firenze 1983, pp. 239-315.
- (60) *Ibid.*, pp. 244-245.
- (61) *Ibid.*, 245-246.
- (62) フィオリーノは1252年にフィレンツェで初めて鑄造された金貨であるが、後に単位貨幣としても用いられ、その価値は年代によって変動した。15世紀の初めは1フィオリーノは約76ソルドに相当したが、1410-1430年の間は79ソルドから83ソルド、1440年ごろには95ソルド、同世紀の後半になると100ソルドを越えるようになっていた。*Ibid.*, p. 12.
- (63) 末子のアンドレアは女性名でも男性名でもあるので、名前からは性別が判定しがた

い。

(64) *Ibid.*, p. 247.

(65) *Ibid.*, pp. 248-249.

(66) *Ibid.*, pp. 250-251.

(67) *Ibid.*, pp. 252-254.

(68) *Ibid.*, pp. 254-256.

(69) *Ibid.*, pp. 257-260.

(70) *Ibid.*, pp. 260-261.

(71) *Ibid.*, p. 261.

(72) 山岳地帯の住民に関しては、Cherubini, *op. cit.*, pp. 121-174. が詳しい。

(73) de La Roncière, *op. cit.*, pp. 202-205.

Summary

Le famiglie e la povertà nella Toscana dei secoli XIV–XV —le discordie tra le città e le campagne—

Tomoko Takahashi

Negli ultimi anni gli studiosi della storia familiare sono d'accordo nell'affermare che la famiglia nucleare era predominante nella società dell'Europa preindustriale. La tesi è applicabile anche alla Toscana dei secoli XIV–XV, anche se la proporzione della famiglia nucleare era minore rispetto al periodo preindustriale inglese. La Toscana era una regione piuttosto straordinaria nell'Europa dell'epoca per la concentrazione della popolazione e delle ricchezze verso la città. La popolazione di Firenze nel 1427 contava 37.245 persone che corrispondeva al 14% del totale della Repubblica fiorentina ma era in possesso dei due terzi della ricchezza totale del suo territorio. Lo squilibrio della ricchezza esisteva anche nelle città. Nella Firenze, mentre l' 1% della popolazione godeva un quarto della ricchezza della città, un terzo della popolazione era costretta a vivere una vita instabile.

Con tali caratteristiche, come erano le situazioni delle varie famiglie toscane e quale relazione ci si trovava con le differenze sia tra i vari ceti sociali e sia tra la città e le campagne? In questo saggio vorrei ricostruire e paragonare le situazioni delle famiglie nella città e nelle campagne. Lascio fuori delle analisi le famiglie dei cittadini fiorentini agiati perchè sono già state fatte ricerche considerevoli a proposito.

Nel periodo precedente alla Peste nera del 1348, la vita degli abitanti

della città era molto instabile a causa della crisi economica, delle carestie e dei rialzi dei prezzi, mentre nelle campagne alcune delle famiglie ricche si spostavano in città per stabilirvisi e gli altri continuavano a vivere delle proprie terre.

La forte diminuzione della popolazione causata dalla Peste portò una serie di cambiamenti sia nella città che nelle campagne. A Firenze i salari dei vari lavoratori aumentavano per la mancanza di manodopera migliorando il loro tenore di vita. Anche se non si potrebbe dire che si sottrassero alla povertà. I numerosi figli, le malattie e la disoccupazione minacciavano spesso la vita. La vita economica nella città era favorevole alle persone singole ma non a quelle che avevano una famiglia da sostenere. Per questi ultimi incombeva sempre la minaccia della povertà e la dispersione della famiglia.

Invece la forte diminuzione della popolazione nelle campagne portò la devastazione graduale delle stesse dalla seconda metà del secolo **XIV** al secolo successivo. Nello stesso tempo si può notare l'evolversi di una serie di fenomeni: la decadenza delle piccole città, lo sviluppo dell'investimento dei cittadini nelle terre di campagna e la diffusione della *mezzadria*, la diminuzione del matrimonio e la decadenza delle famiglie dei proprietari che una volta erano relativamente ricchi e di conseguenza l'impoverimento dei contadini in genere.